



# 風は海から

令和6年5月31日

令和6年度

横浜市立西富岡小学校

学校だより6月号

## 「聴く力」の育成

横浜市立西富岡小学校

校長 黒田 由希子

麦秋至（おぎのときいたる）候となりました。先日、朝会で「四季」「二十四節気」「七十二候」の話をしました。この学校だよりをお届けする5月下旬は、七十二候では「麦秋至」にあたります。初冬に蒔かれた麦の種が大きくなり、実をつけ収穫の時を迎えるので、このように言われているそうです。この季節と「麦」や「秋」という漢字がつながるイメージがありませんでしたが、考えてみると、日差しの強さに麦わら帽子を被ったり、冷たい麦茶がおいしく感じたりし始める季節なので、まさに麦秋至なのだ、自然と季節、そしてそれらを的確にとらえて、言葉に表す感性の奥深さを感じました。

教室から、学習をしている子どもたちの元気な声が聞こえてきます。入学、進級して2ヶ月が過ぎ、学級にも慣れてきて、友達と活発に話し合っている姿がたくさん見られるようになりました。西富岡小学校で大切にしていることの一つに「話を聴く」ということがあります。一般的には「聞く」という漢字が使われると思いますが、あえて「聴く」という漢字にしています。三省堂国語辞典によると、「聞く」は「音・声を耳に感じて知る」とあり、「耳」という漢字を使っている通り、自然と耳に入る音が聞こえてくる状態を言います。それに対して「聴く」は、「詳しく聞くこと」「注意して聞くこと」とありました。「聞く」に比べて「聴く」は能動的で自分の意志が関わっていると言えます。「聴く」という漢字には「心」という字が含まれていますので、心を傾けて相手の話を聴くということなのではないでしょうか。相手の話を「聴く」ことは、「あなたを受け入れています。」という他者受容を示しています。聴いてくれる、心を傾けてくれる仲間の存在は、子どもたちにとっても、とても心強いものです。元横浜国立大学教授の高木展郎先生は、聴く力が育つことによって、①学習者同士が受容的な態度となり、教室の他者に対して共感的な態度をもつようになり、他者を尊重して授業に取り組むことができるようになる。②他者を尊重すると同時に、自己も尊重することで、教室の中での安心感（居場所）が生まれる。③お互いを尊重することで、教室というコミュニティーが形成される。と述べています。（高木展朗著「変わる学力、変える授業」三省堂より）子どもたちの「聴く」力が育つことで、学級や学校が安心できる場所になれば、子どもたちは自ら進んで自己の能力を発揮していきます。一人ひとりの個性や可能性を伸ばしていくためにも、その前提となる「聴く」力を育てていきたいと考えています。